

## 中国法華經疏の研究と今後の課題

菅野博史

はじめに

ただ今、ご紹介頂きました、創価大学の菅野博史でございます。本日は、仏教研究の長い伝統を持つ駒澤大学の仏教学会からお招きを頂きまして、大変光栄に存じております。私も、この学会の会員でございます。といえますのは、以前はわずか千円で、現在は二千円と思えますけれども、四五百頁の立派な雑誌が頂けるということで、かなり以前に会員にならせて頂きました。実際この学会に参加したことも数回ございます。これまで自分の所属する研究機関、例えば、現在勤めている創価大学、東洋哲学研究所、また、今は辞めましたが大倉精神文化研究所というようなところで一般の方を相手に講演をする、講話をするというような機会は比較的多かったのですけれども、他の研究機関からお招きを頂きまして講演をするというのは殆ど今日が初めてじゃないかと思

ます。最近お会いする駒澤大学の先生には、そういう事情を申し上げまして、暗に私を呼んでくださいと申し上げてきたその成果が今日実ってお招きを頂いたのかしらと思ひ、やはり物は言ってみるもんだなと思っております。

今日は不慣れな学会での講演ということで、何をお話していいか迷いました。聴衆の方はどういう方かということをお聞きしますと、仏教学部の諸先生、大学院の方、またいろいろな講座にご出席の仏教に造詣の深い一般の方々に私の拙い講演を聞いて頂くと、こう伺いました。そういうことで、学会発表のようなあまりに専門性の高いものでも相応しくはないわけですし、一方、今申し上げた方々に聞いて頂くのには、あまりに入門的なお話でも失礼になるうかと存じました。私のこれまでの研究は、今日の演題にあります、中国法華經疏の研究でございます。これらの研究を今までできて、著作、論文も発表してきましたが、その著作、論文には書いていない、あるいは書けなかった研究の背景とか問題意識というも

のをご紹介したいと思ひ、また自分自身の研究内容を振り返るとともに、できれば若い大学院の研究者の方々に今後の研究課題をお話しして、多少の参考にして頂ければ幸いかと思ひまして、このような演題を選ばせて頂きました。講演ということで個人的な思い出に触れることがあろうかと思ひますが、予めご容赦頂きたいと思ひます。

私は一九七一年に東京大学の文科Ⅱ類に入学致しました。今から考えると大変恥ずかしいのですが、高校生の時、経済学の何たるかを全く知らないままに、経済学者になることを漠然と夢見て大学に入りました。今はもう無くなつてしまつたのですけれども、駒場寮で一年間過ごしました。当然寮に住んでおりましたので、大学の教室には最も近いはずなのですけれども、朝方就寝、昼過ぎに起きるといふ自堕落な生活を繰り返しておりましたので、殆ど大学の講義には出ることはありませんでした。そのような生活の中で、また受験勉強から解放された流れの中で、哲学や宗教や仏教に次第に関心が移つてゆきました。結果としては七三年、三年への進學時に、文学部の印度哲学印度文学専修課程に進學致しました。ちょうどその時は、中村元先生が定年退官される時でして、二月に最終講義があつた時、まだ二年生でありましたけれども、本郷の方に聴講に行ったことを懐かしく覚えております。実は、二年生の四月に、経済から文学の方に進路を変更して

仏教学者を目指したいという希望を持ちましたので、先ほどご紹介にありましたように、故郷が福島県福島市で、父がおりましたので、父にその旨話をして快く許してもらいました。その父が、それから五ヶ月後に五十二歳の若さで急逝するのはその時は夢にも思つていませんでした。その当時の我が家の経済状況などを考えますと、進路の再変更、つまり、一年留年してもう一度経済学部に進むという選択も今から考えるとあつたはずですが、若気の至りというか、そういうことは全く考慮する余裕もなく、そのまま印哲の方に進んだわけでございます。そして、大学院の修士課程に七六年に入学致しました。私は大学院に入学するまで、子供の頃から親しんできた日蓮遺文に類出する中国の天台教学を学びたいと思つておりました。大学院の口述試験の時に、当時主任教授であつた玉城康四郎先生から、次のようなエピソードを引かれましたアドバイスを頂きました。島地大等先生、日本天台教学史、日本仏教教学史の研究をなされた大變有名な先生ですが、その先生のお弟子さんに坂本幸男先生がいらつしゃつたんですね。坂本先生は岩波文庫の『法華經』の漢文の方の担当もされておりますし、立正大学の学長までなされた先生でございます。日蓮宗僧侶でありましたから、たぶん天台教学を研究したいと島地大等先生に申し上げた所、若い時は広い視野に立つて勉強するように、研究するようにという指導

をされたそうです。そこで、坂本幸男先生は天台を一先ず置いて中国華嚴ですね、慧苑の研究に関する学位論文を出されております。そういう大変ご高名な先生方のエピソードを、わざわざ玉城先生が引かれて、私が日蓮教学と天台教学を短絡的に結びつけて天台三大部の研究をしたいと面接試験で申し上げたことに対して、ご指導を頂いたわけです。このようなアドバイスは、先生方が若い研究者にアドバイスするときには、比較的一般的なのかなと思うところがあります。というのは、私は、最近、立正大学の三友健容先生からご大著を頂戴しました。その「あとがき」を拝見しますと、三友先生もほかならぬ坂本先生から、私が受けた指導と基本的に共通な指導を受けた思いを書かれておりました。<sup>1</sup>玉城先生のご指導は私にとっては本当に貴重であり、ありがたく思っております。そこで、修士課程に入学後は、一先ず天台三大部を横に置いて、吉蔵の法華経注釈書に取り組みました。吉蔵は三論宗の大成者として有名ですが、『法華経』に対して現存するものだけで四種もの注釈書を著わしました。『法華玄論』『法華義疏』『法華遊意』『法華統略』です。玉城先生は私の大学院修士課程の入学と同時に退官されて、東北大学に移られました。そこで、日本仏教の講座の担当者でありましたが、中国の天台教学に造詣の深い田村芳朗先生に指導教官をお願い致しました。田村先生のご指導のもとで、私

は「嘉祥大師吉蔵の法華経観」という修士論文で修士の学位を得ました。私が修士課程に入学した直前には、平井俊榮先生がご自身の学位論文を『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』として刊行されていきました。そして、吉蔵研究の第一人者の地位を不動のものとされていらつしやいました。平井先生は、私が学部で印哲に進学した一九七三年度と七四年度の二年間、東京大学で講義をされ、私も受講させて頂きました。平井先生のご著作は大部なものです。その中には吉蔵の法華経疏の研究は含まれておりませんでした。もちろん、学位論文をまとめるに当たって、どこかでやはり研究対象と限定せざるを得ませんので、先生の場合は般若思想史研究というようにテーマを絞られて学位論文をまとめられたのだと思います。この時点では、吉蔵の法華経疏の研究は含まれていなかったわけです。

当時、中国法華思想史の研究の分野では大きな本として、山川智心先生が出しました『法華経思想史上の日蓮上人』<sup>2</sup>、と塩田義遜先生の『法華教学史の研究』<sup>3</sup>、また坂本幸男先生が編集した『法華経の中国的展開』の三冊がございました。山川先生のご本は昭和九年に新潮社から出されたもので、これは東大に提出した学位論文です。山川先生は国柱会の方でございました。伝記等を拝見しますと、小学校しか出られておらなかったようでございますけれども、田中智学先生の下

で日蓮教学についてすぐれた研究をされた方です。そこで、姉崎正治先生が山川智応先生に、東大に学位論文を提出したらどうかとアドバイスをされたそうです。山川先生は田中先生の許可を得て、わずか一年ほどで『法華經思想史上の日蓮上人』をまとめられました。それまでの研究の蓄積は当然あったとは思いますが、いろんな仕事、雑務を免除してもらってこれをまとめたといいことでしょうね。宇井伯寿先生が論文審査の主査でして、この本には宇井先生の長文の審査報告が載っていて面白いです。

塩田義遜先生は身延山短期大学の教授でした。振り返りますと、このお二人の間には、日蓮の『三大秘法抄』の真偽問題をめぐって激しい論争をされたこともございました。坂本幸男先生の編集したご本は、中国の法華經疏に関する多数の論文をまとめたものでした。

この当時は、吉蔵の法華經疏に限定致しますと、身延山短期大学の里見泰穂先生、当時立正大学におられた丸山孝雄先生、そして大正大学の村中祐生先生が吉蔵の法華疏に関して幾つかの論文を発表されておられました。私は一九七七年に日本大学の文理学部で開催された印仏学会で、初めて丸山先生にご挨拶を致しました。私はそのとき修士課程の学生でした。丸山先生の許可を得まして、立正大学の先生の講義に半年間出席させて頂きました。ちょうど『法華遊意』をテーマ

にした講義を半年間されまして、それを聴かせて頂いたということがございます。東大の講義はさぼってばかりで、殆ど授業に出ていないようなひどい学生でございましたが、他大学の先生に特にお願いして授業を受けさせて頂いているわけですから、これはもう、無遅刻無欠席で半年間出席させて頂きました。あいにく一時間目の授業でした。当時立正大学は八時半から授業がありまして、五反田まで半年間通ったことを懐かしく思い出します。この時のご縁で、丸山先生が間もなく『法華教学研究序説—吉蔵における受容と展開—』<sup>6)</sup>を刊行されましたときには、専門が近いということで校正のお手伝いをさせて頂きました。また、村中先生を大正大学の研究室にお尋ねしたこともございました。村中先生の吉蔵関連の四本の論文は、後に『天台觀門の基調』<sup>7)</sup>に収録されました。

さて、一九七九年に博士課程に進学した後は、吉蔵以外の仏教者、例えば、道生、法雲、天台智顛などの法華經注釈書を研究するとともに、研究分野を拡大するために、『法華經』のみならず大乘の『涅槃經』、『維摩經』の注釈書も研究致しました。その後、博士論文を提出する時機が熟したため、改めてそれまでの中国における『法華經』注釈書の研究を整理致しまして、「中国における法華經疏の研究」と題する学位請求論文を提出し、幸い一九九四年に博士の学位を授与されました。この博士論文は『中国法華思想の研究』<sup>8)</sup>として刊

行しましたが、その後も今日に到るまで、中国の法華疏を中心に研究を続けて参りました。

学位について申しますと、私が大学院生のころは、ある程度の歳にならないと学位を取得できないというような状況でした。その後、ちょうど時代が論文博士から課程博士に切り変わりつつあるとき、印仏学会の懇親会で、今は亡くなられました鎌田茂雄先生が私どもに、「私は今、愛知学院大学と駒澤大学の博士論文だけで四、五本の審査を抱えている。あなたたちも遠慮することはないので、どんどん博士論文を書いて提出しなさい」というようなアドバイスをしてくださいました。私は気が短い方なので、その懇親会の会場に、私が論文を提出したとき主査になつて頂くはずの木村清孝先生がいらつしやいましたので、木村先生のところを友人と一緒に行きまして、今、鎌田先生から貴重なアドバイスを頂きましたが、学位論文を提出してもよろしいのでしょうかと申し上げました。木村先生は、「結構ですよ、どんどん出して下さい」とおっしゃいましたので、私は一年間、今までの論文をまとめたり、統一を取ったり、欠けている部分を補った新しい論文を書いたりと準備して提出しました。ただ、私の学位論文には天台三大部の研究は殆ど含まれておりません。「信解品」の長者窮子の譬喩については、『法華文句』『法華玄義』の研究を致しましたが……。一昔前の学位請求論文であ

れば、当然天台三大部の研究も含めなければならぬと私も思っておりましてので、内心、これはかなり時間がかかると覚悟しました。ところが、木村先生にご相談したところ、天台三大部の研究は、学位を取ってからゆつくり挑戦すればよいという、ありがたいアドバイスを頂きましたので、速やかに提出することができたわけでございます。

少し個人的な思い出を含めてお話ししましたが、ここでのよいよ本題に入りまして、中国法華経疏に関する人物、法華経疏ごとに、研究の背景、問題意識、今後の課題などをまとめてお話ししたいと思います。

### 一、道生『妙法蓮華経疏』

初めに道生の『妙法蓮華経疏』についてです。鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』に対して、門下で注釈を著した者は、道融、曇影、慧観などの名が伝えられておりますが、現存するものは道生の法華経疏のみでございます。私が道生の法華経疏を研究した当時は、横超慧日先生の「竺道生撰『法華経疏』の研究<sup>9)</sup>」という長編の優れた論文がございました。この論文は、一九五二年に出されております。私が生まれた年に出された古い論文でございますが、大変優れた論文です。また、七六年、七九年には『三康文化研究所年報』に道生疏の訓読訳、

注が掲載されました。<sup>10)</sup>ご承知のように道生疏は『大日本統蔵經』に収録されていますけれども、写本が一つしかございません。判読不明の文字や誤写が多く、解説が大変難しいテキストでございます。残念ながら『三康文化研究所年報』に掲載された道生疏の訓読訳にも誤りが少なくありませんでした。その後、Young-ho Kimという方がアメリカで出された学位論文の中に、道生疏の英文の訳注を発表されました。<sup>11)</sup>これが今のところでは最も詳しい研究かと思えます。今後は、現代語訳や注の作成が必要かと思えます。

羅什の門下の中では、僧肇と同じように、道生の著作は、『法華經』の注釈書、また『注維摩』『大般涅槃經集解』の中に収録されている『維摩經』注、『涅槃經』の注がかなりの量、採用されておりますから、著作の量としては、この時代の人としては比較的多いと思えます。道生は頓悟説の提唱者として有名です。道生の頓悟の概念は、漸進的といえますが、段階的な悟りを認めず、究極的な悟りの直前まではあくまで迷いの範疇であるといえます。後世のある文献では、道生のこの頓悟に関して、金剛心まで、要するに菩薩の最高の位までやはり夢の範疇であり、迷いの範疇であるということを経験してあります。一方、漸悟説というのは、菩薩の第七地等で、真理を見ることができるといいう理論でございます。この道生の頓悟説というのは、悟りの超越性といえますか、迷

いと悟りの間には、超越というか断絶があるということを経験する理論だと思えます。道生と同時代の謝靈運、山水詩人として著名な謝靈運は、道生の頓悟説に賛同しまして『弁宗論』という論文を書いております。この論文とともに、他の僧と頓悟・漸悟に関して議論した手紙をまとめたものが現在残っています。

謝靈運という人は、インドの仏教の長所は聖人になることができる、成仏することができる、究極的なものに到達することができるということであり、仏教の欠点は、そのような目標を達するのに段階を踏んで行かなくてはいけないと言っています。これがいわゆる漸悟ですね。それに対して、中国の儒教の長所は、究極的なものに一気にアクセスできるということとです。欠点は、孔子の一番弟子である顔回でさえも「殆庶」、つまり「殆ど庶し」と言われるだけであって、究極的なものには自ら達することはできないということです。そうしますと、仏教と儒教の両者の長所を両方持つてきていいところ取りですね、「折衷」とその論文にも出てきますが、折衷しまして、要するに段階を踏まないで、たちどころに究極的なものに達するという考え方が道生の頓悟説であり、これに賛成すると言っているわけです。この道生の理論も、謝靈運の『弁宗論』もよくみると非常に微妙ですけども、悟りを得るまでの時間的なスピードを必ずしも言っていない。

道生の頓悟説は、悟りの超越性を主張している。謝靈運の場合も基本的にはそういう考え方なのだろうと思うのですね。ただ、問題はご承知のようにインドの仏教では、成仏するまでの時間を歴劫修行、三祇百劫と言って、ものすごく長い時間かかって成仏すると言います。一方、中国では、この現世で悟りを開くという考え方を重視するようになっていきます。その場合は、悟りの絶対性とか超越性という意味ではなくて、悟るまでの時間の長短という問題になってゆきます。この問題については、悟りまでの時間の短さが中国仏教ではだんだんと強調されていくと思うのですが、悟りの超越性という道生の本来の考え方からのそのような変化の筋道について、私は若干関心を持っております。禪宗の頓悟説と、道生、謝靈運の頓悟説との同異について勉強したいと思っています。興味のある方がいらっしゃいましたら、是非研究して頂きたいと思います。

さて、早島鏡正先生が東大を退官される時には、通常の還暦記念論文集ではなくて、若い学生の学習のために、仏教やインド思想の辞典の刊行を希望されました。私はまだ博士課程の学生でしたから、「現観」(abhisamaya)と「機根」という二つの項目だけ執筆依頼を受けました。機根という言葉は、日本、中国の仏教では重要な概念でございます。これについては、横超慧日先生が、一九四四年に出された論文、

「仏教における宗教的自覚―機の思想の歴史的研究―」<sup>13</sup>という大変立派な論文がございました。横超先生は、「道生がすでに機感という語を後世仏教の術語として用いるのと同じの意味で使っているのはすこぶる注目に値する」と指摘されています。私は道生の法華經疏を学んでいる中で、この機という重要な術語がたくさん出てきていることに気づきました。この道生の用法が、いわゆる機根とか機という言葉の中国仏教的な用法に、大きな役割を果たしているのではないかと、いうふうに考えまして、「機根」という辞書の項目を執筆するとともに、「道生における機と感応」<sup>14</sup>という論文を発表しました。その他、道生の場合、「理」という概念も中国仏教に大きな影響を与えたと思われ、この道生の理の用例の分析を試みました。八五年に、『大般涅槃經集解』における道生注<sup>15</sup>という論文で、道生の理について考えました。この研究は、後に幸い伊藤隆壽先生のご研究<sup>16</sup>に参照して頂きました。

## 二 敦煌写本の法華經疏

次に、敦煌写本の法華經疏についてでございます。法華經疏として全体が残っているものは、道生の後は、光宅寺法雲(四六七―五二九)の『法華義記』でございますが、ご承知のように敦煌から発見された幾つかの法華經疏の断片が残っ

ております。当時は、敦煌の法華經疏に關しては大正大学の平井宥慶先生が論文を書かれていたと思います。その後、平井宥慶先生は、「敦煌文献より見た『法華經』研究」<sup>18</sup>という論文を発表しておられますし、中国の方廣錫先生も敦煌で発見された法華經疏の網羅的な紹介をされています。私の学位論文では、『大正大藏經』に収められている『法華義記』、すなわちスタイン本の S733 と S4102 に相当するものと同名の法雲の『法華義記』とを比較対照した研究をしました。その時はそれだけの研究しか出せませんでした。

その後、『法華經文外義』という注釈書のあることを知りました。これは『敦煌吐魯番文獻』<sup>20</sup>の中に収められているもので、池田温先生から教えていただきました。約四万文字の、比較的短い注釈書であります。随文釈義の注釈書ではなくて、『法華經』の思想に關連したトピックを選んで、例えば、『二智』ですね、権実の二智。あるいは「因縁を明かす」、あるいは「若しは二、若しは三」という有名な方便品の句、あるいは「舎宅を焼く」、三車火宅の譬えですね。その他、「淨土」、あるいは「五百由旬險難道」とか、そういうテーマを取り上げて問答形式によって、注釈考察を加えたものがございます。この写本には、「大統十一年、歲次乙丑、九月廿一日、比丘惠襲於法海寺写訖、流通末代不絶也」という題記があります。この疏は惠襲が大統十一年(五四五年)に書写し

たのですから、本書の成立は大統十一年以前であることとなります。法雲が亡くなった年は五二九年でございますから、年代からいいますと、法雲の『法華義記』よりはやや新しい可能性もありますけれども、『法華義記』はご承知のように弟子によって成立したものでございますので、『法華義記』の現行本の正確な成立年代はよくわかりません。この両者の成立年代は、どちらが早いかということは分かりません。年代的には非常に接近しているということが推定されます。

その後、方廣錫先生が編集している『藏外仏教文獻』<sup>21</sup>に、二人の中国の学者がこの文献の翻刻をなさいました。大變手間のかかる翻刻が提供されましたので、怠け者も私も内容的な研究はしなくてはいけないと思ひまして、『法華經文外義』研究序説<sup>22</sup>という論文を印仏研に発表しました。その他、ペリオ本 P3308 の『法華經義記』という、五三六年に書写されたものがあります。大變古くて重要なものですが、私は研究しておりません。ただ、平井宥慶先生の紹介の中に、方便品の有名な偈文、「諸仏両足尊 知法常無性 仏種從緣起 是故説一乘 是法住法位 世間相常住 於道場知已 導師方便説」(大正九・九中八一〇)に対する注が見られ、興味深いものです。

「知法常無性」とは、一乘法には三乗性のないことを知ることである。「仏種從緣起」とは、一乗の法が菩提



を生ずることのできることを、仏種と呼ぶ。ただし妙果には登ることが難しく、しだいに三乗の助けを積む必要があることを、縁と名づけるのである。小を経由して大を顕わすので、「從縁起」と言うのである。「是故説一乘」とは、かの行者がかならず三乗の方便の救い取りを借りて、大乘の悟るべき機がはじめて生じる意味であるので、今日、「得説一乘」と名づけるのである。「是法」とは、三乘法のことである。「住法位」とは、一乘法の位に住するのである。三乗を聞いて一乗に住するのである。有相の善はさまざまである。「相常住」とは、世間の有相の善が一乗に住することである。

知法常無性者、知一乘法無三乘性。仏種從縁起者、一乘之法能生菩提、稱為仏種。但妙果難階、要須漸積三乘資助、名為縁也。由小顕大、故言從縁起也。是故説一乘者、是彼行者要仮三乘方便引接、大乘道機方発義故、今日□名得説一乘也。是法者、是三乘法。住法位者、住一乘法位也。聞三住一。諸相善異也。相常住者、世間相善之住一乘也。<sup>23)</sup>

ここでは、仏菩提を生ずることのできる一乘法が仏種とされます。仏菩提が果であり、一乘法は因です。因を種子と表現したのです。また、仏菩提を実現するためには、三乗の助けが必要であり、これを縁と名づけます。つまり、三

乘法を縁としています。「仏種從縁起」は、一乘法が三乗より生起することを意味します。「是法住法位」は、読みに問題のある句で、法雲や智顛は「是の法は法位に住す」と読み、吉蔵や基は梵本と同じく「是れは法住・法位」と読むことが知られていますが、この敦煌疏は、前者の立場と共通で、三乘法が一乘法の位に住すると解釈しています。「世間相」は、世間の有相の善と解釈しているようです。これは法雲の「世間相常住者、只是世間取相諸善亦住一乘仏位。」（大正三三・六〇七下二四—二五）に類似した解釈です。ちなみに、世間相常住については、最近大正大学の池田宗讓先生が論文を出されました。<sup>24)</sup>

また、龍谷大学図書館に法華經疏の梁代の敦煌写本が所蔵されておりまして、「方便品」と「譬喩品」の注釈が現存しています。佐藤哲英先生の『続・天台大師の研究』に簡潔な紹介が示されていますが、敦煌写本としての真偽問題があります。偽物だという人もいますので、この研究は難しいわけです。私もコピーを入手しましたが、十分には研究しておりません。

現存する敦煌の法華經疏は、必ずしも数は多くはありませんが、まだ翻刻や訳注、思想研究など研究の余地があると思いますので、今後取り組むことができればと思っております。

### 三 劉虬『注法華經』

次に劉虬の『注法華經』についてでございます。『注法華經』は吉藏の『法華經疏』に五〇箇所ほど断片が引用されておりますので、それをまとめて逸文集といえますか、そういうものを作り、その思想的な特色を明らかにしたわけでありませぬ。劉虬はこの究極的なもの、具体的には究極的な教えや仏身、究極的な悟りなどが相対的概念によつては把握できないことを強調しております。例えば仏身は存在と非存在の対立を越えていること、仏の寿命は長短の対立を越えていること、『法華經』の究極的な立場は三乗と一乗との対立を越えていること、空有の対立を越えていること、国土の差別や悟りにおける大乘、小乗の差別は究極的にはないこと、あるいは三車火宅の譬えでの車の大小の差別や五百由旬と三百由旬の遠近の差別が究極的にはないこと等が指摘されております。このような劉虬の空の思想に基づく解釈は、劉虬が参照した鳩摩羅什門下の法華經觀と類似したもので、これを継承したものであるとともに、吉藏の共感をよんで、吉藏によつて積極的に参照されたわけでございます。一方、劉虬は相対概念による把握を絶する面に偏る傾向が強く、相対的次元において差別、対立が存在する意味をやや軽視する傾向があると吉藏

が批判しております。劉虬については、私が収集した五〇箇所の逸文以外に、多少それを増やすことは可能でしょうが、断片しか残っておりませんので、研究には限界があるかと思ひます。ただ、より詳細な思想的な分析は可能かと思ひます。この逸文の中で、私は一箇所、途中で文章を切つてしまったために補わなくてはいけないところもあります。訂正して頂ければ幸いです。

### 四 法雲『法華義記』

次に法雲の『法華義記』についてでございます。法雲の『法華義記』については一つ思い出がございます。修士課程に入る直前、指導教官をお願いすることになっておりました田村先生の書かれた「法雲の法華義記の研究」という論文を読みました。修士課程に入つて中国の法華經疏を研究しようと思つていた私は、大正蔵經を見てもですね、『法華義記』には返り点が付されていませんから、こういうものを研究するのは自分に本当にできるかなと心配といひますか、不安に思ひまして、先生にその旨申し上げたところ、田村先生は笑つておられました。後に自分が『法華義記』の訳注研究を出版することなどは當時は思つてもみませんでした。

『法華義記』は後代の注釈家によつてたくさん引用されて

いますけれども、どうも引用されている後世の引用と今我々が持っている現行本とは文章の違い等が結構多いんですね。そういう意味では『法華義記』の現行本に至る写本の流通について、本当はもうちょっと研究できれば面白いなと思います。これも新しい写本が発見されないとなかなか難しいかなと思います。

## 五 慧思『法華經安樂行義』

次に南岳慧思の『法華經安樂行義』でございますが、これには思い出があります。八二年にアメリカからダニエル・ステーパーンソンさんが来日しました。彼の受け入れ大学は正大学でございました。彼の専門が中国天台でございましたので、大正大学が受け入れたのですね。当時、大正大学の多田孝正先生から、東大の中国仏教を研究している院生と大正大学の天台学研究室の院生とが読書研究会を開いてはどうかというお勧めがありまして、我々はそのような研究会を毎月開いておりました。当時は慧思の『立誓願文』の訳注研究をやっておりました。<sup>20</sup>ダンさんもその会に出てこられて、私は初めて面識を得たのでございます。年齢も私と全く同じ歳で、専門も中国天台ということでしたので、我々は全体の研究会とは別に、二人だけで『法華經安樂行義』の研究会を開こう

ということにしました。一年間ほど、彼が用意していた『法華經安樂行義』の英語の翻訳の検討をしました。その後、彼の帰国の前に、京都はやはりいつべん旅行に行ってみたいし、京都で先生方にお会いしたいということで、付き添って行きました。当時「中国的新仏教へのエネルギー―南岳慧思の場合―」<sup>21</sup>という優れた論文を書いた川勝義雄先生が京大の人文研におられましたので、この先生をお訪ねしたり、あと大谷大学の天台の専門家である福島光哉先生をお訪ねしました。彼はその後、四種三昧の研究で母校のコロンビア大学で学位を取りましたが、私は当時は、北京、中国以外に出張するほか、殆ど海外出張もございませんでしたし、彼も来日する機会はございませんでしたので、殆どお付き合いすることはないという状況でした。細々とした交流が続いていただけでした。私が学位論文を出版した時には、論文の要旨をですね、英訳で出さなくてははいけませんので、彼にお願いしたこともございました。

その後、二〇〇〇年の八月に、国際アジア北アフリカ研究会議 (ICANAS) がカナダのモントリオールで開かれました。私はカナダは初めてでした。モントリオールまでの直行便もございませんでしたので、アメリカのどこかで乗り換えるということになりました。もちろんアメリカに行くことも初めてでした。今後いつ行くことができるかどうかともわからない

と思います。旅行はあまり好きではありませんが、ちょっと勇気を出して彼のいるカンザスを訪ねることにしました。シカゴで乗り換えて、カンザスまで行きました。彼の家に滞在中、彼は私に、『法華經安樂行義』の英訳についてまだ興味を持っていますかと聞いてきました。私は興味を持っていますとお答えしました。そこで我々はこの『法華經安樂行義』の英訳を完成、出版する相談をし、二〇〇二年の夏に三ヶ月、そして二〇〇五年の夏に一ヶ月間、創価大学の国際仏教学高等研究所に客員研究員としてお招きして、共同研究をしました。訳注の推敲を重ねたわけでございます。やっとなとですね、二〇〇六年の三月に仏教研究所のモノグラフシリーズの第9号として刊行することができました<sup>32</sup>。本当に一九八二年から二十数年経ってやっと完成することができて、人文系の学門は大変時間がかかるなあと感じましたし、また多少の達成感もございました。

このモノグラフの中に書かれているダン・ステイブンソンさんの南岳慧思に関する論文は、英文で百八十頁もある大部なものでございまして、現在、慧思の研究では最先端のものだと思いますので、是非ご参照頂きたいと思います。仏教研究所のホームページにもPDFファイルがアップされていますので、簡単にダウンロードもできますし、本が欲しい場合にも方法がございますので、またおっしゃって頂ければ

と思います。

『法華經安樂行義』については、今申したように英文の訳注はあるのですが、日本語による訳注はございませんので、いづれ私もそれに取り組んでみたいと思います。また『隨意三昧』『諸法無諍三昧法門』というような大事な慧思の文献もやはり訳注研究がございませんので、これも誰かが取り組まなくてははいけないなと思っております。

## 六 吉蔵の法華經疏

次に吉蔵に関してでございますが、吉蔵は先ほど申し上げましたように、修士課程から一貫して取り組んできました。一番思い出に残るのは、名古屋の大須観音に所蔵される『法華統略』の研究でございます。伊藤隆寿先生の「三論宗関係典籍目録（稿）」<sup>33</sup>に基づきまして、私は集められるだけの写本、京都大学、大谷大学、東洋大学、東大寺などの写本を集めました。それとともに、大須観音に真福寺宝生院文庫としてこの写本があることを知り、黒板勝美先生の奥書を写したのも報告されておりましたので、それを目当てに名古屋へ行ったわけです。驚くことにですね、他の『法華統略』の写本に全て欠けている「薬草喻品」と「授記品」と「化城喻品」の注釈が基本的に前部含まれているんですね。しかも統

蔵本を読むと、字が間違っているなとすぐに解るところがた  
くさんあるわけです。そういう誤字が、その写本を見ます  
と、ほとんど正しい文字というか、妥当な文字になっている  
んですね。それだけ写本の質が高いということです。奥書も  
あって、東大寺の東内院の珍海のもの伝わってきたとかで  
すね、そういうようなことも書かれていて、そういう意味で  
は写本としての由緒も正しいというようなことでございまし  
た。大蔵出版から『法華統略』の訳注を出した時に、この翻  
刻も学術的価値が高いと思ひまして発表致しました。

ところがその後ですね、智山伝法院編の『真福寺文庫撮影  
目録』上巻、下巻が出版しました。それによれば、『法華統略』  
のマイクロフィルムが二種類掲載されておりました。私が実際  
翻刻したものは、上巻に掲載されているものであります。智  
山伝法院にお電話をしたところ、許可等は須観音の方に問  
い合わせて下さいということでしたので、お手紙を出しまし  
たが、ご返事を頂けませんでした。残念ながら、このマイク  
ロフィルムはまだ見ていません。また二種類の写本があるの  
ですけれども、奥書だけは全部紹介されており、私が翻刻し  
たものでない写本の奥書は字が間違っていたりする点もあり  
まして、私が翻刻した方がたぶん質が高いのかなと思います。  
今後研究する方は、私が翻刻しなかった写本もご覧頂きたい  
と思います。私自身は、マイクロフィルムを幸か不幸か見ま

せんでしたので、暇な時間を見つけては名古屋に出張して、  
直接この写本を見ました。今から考えると、かえって良かった  
と思っております。

実際ですね、この『法華統略』の思想的な研究というものは、  
私も十分にはしておりません。訳注とか翻刻でエネルギーを  
使い果たして、自身の研究までエネルギーが残っていないな  
かったみたいない感じでしょうか。『法華統略』は吉蔵の最後  
の法華経疏であるだけに、非常に興味深い法華経観が見られ  
るのです。たとえば、次のような解釈です。

吉蔵は、「如是」とは、『法華経』が深大であるということ  
を信じていることであると解釈し、「深大」の文字を解釈してゆ  
きます。これは「薬王菩薩本事品」の『法華経』が深く大き  
いと、深大であるという言葉の解釈をしている中でなんです  
けれども、「深大」のなかの「大」について、次のように述  
べています。

第一に、四実・四権・四因・四果はとりもなおさず一  
経の大意であることを明かすのである。第二に、近く  
は『華嚴経』の始めから（沙羅）双樹の終わりまでを包  
括するのである。第三に、釈迦の過去の成仏を収めると、  
逸多「弥勒菩薩」はその（過去の成仏の）始めを見ず、  
未来はひっそりと静かで変化しないので、多くの聖者は  
その終わりを測ることがない。（経過した）時が長く教

化が広いので、その内にすべて入らないことはないの  
ある。第四に十方三世の仏たちはすべての実からすべ  
の権を生じ、すべての権を収めてすべての実に戻着させ  
ることを総括する。(以上が)「窮大」の意味である。

一 明四実四権四因四果即一經之大意也。二 近該華嚴之  
始竟双樹之終也。三 撰釈迦過去成仏、逸多不見其始、未  
来湛然不変、群聖莫測(底本の「側」を改める)其終。  
時長化広、莫不入其内也。四 総括十方三世諸仏從一切実  
起一切権、撰一切権以歸一切実。謂窮大矣。(続蔵一  
四三一一・五左上―下)

と。ここに示される四義はいずれも『法華經』が「大」であ  
る理由・根拠を明らかにするものです。なかでも、第二義に  
おいては、近くは、つまり、今世に限れば、仏の説法の始め  
である『華嚴經』から最後の沙羅双樹での『涅槃經』までの  
一切の経を『法華經』は包含するのであり、それゆえ、『法  
華經』は「大」なのであると述べられています。さらに第  
三義においては、『法華經』が如来寿命品に説かれるように、  
釈迦の過去久遠の成仏から未来の永遠不変性まで包括するも  
のであるから、弥勒もその始源を知らず、聖者たちもその終  
わりを知ることができず、『法華經』の説く範囲は時間的に  
も長く、仏の教化も広大で、すべての教えが『法華經』の中  
に含まれてしまうことが指摘されています。第四義において

は、『法華經』が十方三世のあらゆる仏の権実の教化、すな  
わち、一切の実より権を生じ、またその権を収めて実に戻着  
させるという教化を包含することを指摘しています。つまり、  
『法華經』が三世十方の諸仏のあらゆる教えを包含する偉大  
な經典であることを重層的に指摘していることが注目され、  
『法華統略』以前には見られないスケールの大きな法華經觀  
を確認することができます。

また、天台智顛の經典解釈の方法の中に觀心釈というもの  
がございいますが、それに対応するものとして、この『法華統  
略』においては無生觀による『法華經』の解釈方法というも  
のが説かれております。いわゆる「如是我聞」の「如是」と  
いう言葉を信心の信です、信ずるといふことと解釈した上  
で、この信は『法華經』の深大である、深く大であることに  
対する信であり、更に自己自身が深大であることに對する信  
をも含むんだと、この重大な事実の論拠を無生の概念によつ  
て示しております。それは単なる字義の解釈ではなくて、如  
是に對して無生を觀察する、無生觀という実践を行うもの  
でありました。吉藏はこの無生觀によつて三世十方の仏法  
が、自己自身の内に具わるとまで言っております。しかも  
「如是」ばかりでなく、「歡喜奉行」までということとは『法華  
經』の初めから終わりまでですね、『法華經』の全体に對し  
て、この無生觀を実践すべきことを説いております。この無

生観による経文の解釈は経文を自己に引きつけて解釈する実践的な解釈という点では、智顛の観心釈に対応するものかと思えます。このような興味深い解釈が『統略』に出ているのですね。

私の『法華統略』の翻刻は、特にこれまで知られていなかった「菓草喩品」「授記品」「化城喩品」の注釈の部分が新しい成果ですが、幸い奥野光賢先生の吉蔵の声聞成仏思想の研究にも利用して頂きました。まだまだ『法華統略』の研究の余地はあると思いますので、ぜひ大学院生の方に挑戦して頂きたいと思っております。

『法華遊意』についてはですね、私は「法華とは何か―法華遊意」を読む<sup>37)</sup>という本を出しました。チャールズ・ミユラー先生の元暁の『法華宗要』の英訳と解説を拝見しますと、『法華遊意』は元暁の思想に影響を与え、引用もされているんですね。そこで、ミユラー先生は韓国仏教の専門家という立場から、『法華遊意』にはとりわけ興味があるようで、いずれこの『法華遊意』の英文の訳注を一緒に出したいと相談しているところでございます。

『法華玄論』については、平井俊榮先生の二冊の本で訳注が完成しています。<sup>38)</sup>

『法華義疏』については横超先生の国訳があるだけです。国訳一切経のシリーズのなかの国訳としては、詳しい注釈が

付されていて便利です。ただ、今となっては、さらに現代的な訳注が必要でありましょう。

## 七 智顛・灌頂『法華玄義』『法華文句』

智顛・灌頂の『法華玄義』『法華文句』についてですが、『法華玄義』については先ほど、ご紹介頂きましたが、『法華玄義』のテキストと『法華玄義入門』を出したことがあります。<sup>40)</sup>『法華玄義』の翻訳については、南山大学のポール・スワンソン先生が一部分だけありますけれども、英訳を出されています。<sup>41)</sup>その後、中国の女性の学者で沈海燕氏が、『法華玄義』の全文の英訳、訳注を出版されており、二〇〇五年の八月にロンドンで国際仏教学会が開かれた時、私は初めて彼女の研究発表を聞きました。その時、彼女がベルギーのセント大学で学位を取った論文をインドで出版したものを紹介しました。研究編と訳注編という二冊です。研究編よりも、訳注編の方が、『法華玄義』全文の訳注ですから、分厚いものです。私は直接、その場で入手しました。また、台湾の李志夫先生は『妙法蓮華経玄義研究』<sup>42)</sup>という大変詳しい文献学的なテキスト研究書を出しておられます。これは便利な本です。

『法華文句』については、平井俊榮先生の『法華文句の成

立に関する研究<sup>44)</sup>が画期的な研究でございました。『法華文句』が吉蔵の『法華玄論』『法華義疏』の影響を受けて成立したことを論証したものであります。この研究は、天台の研究者には大きな衝撃を与えたと思います。その点、私は幸い先ほど申し上げましたように、吉蔵の法華經疏の研究を最初にやりましたので、ショックはあまりありませんでした。と、いいますのは、天台の研究だけをしている場合、天台の思想はこうこうだと議論してもですね、後でこれは吉蔵にも同じことがありますよと言われたら、その研究はもうアウトです。天台を研究した人も吉蔵の『法華經』の注釈書を詳しく検討しなければ、軽々しく天台に関する論文は書けないという時代になってしまったと思います。私の場合は、振り返れば玉城先生の貴重なアドバイスのおかげで、そういうことはありませんでした。ただ、平井先生の研究の一部には、やはり問題がないわけではありませんので、僭越ながら『法華文句』における四種釈について、印仏学会で平井先生の見解を批判申し上げました<sup>45)</sup>。

今、私は『法華文句』の訳注を第三文明社から刊行中でございます。実は『法華玄義』のテキストを十数年前に出しまして、初版を発売するのに時間がかかり過ぎたのですね。その後、出版社から私の方に注文が来なくなりました。九年経ちましてやっと『法華玄義』の初版が全部売れた

ということ、『法華文句』の訳注をお願いしたいと言われました。『法華文句』のⅠとⅡを出しました。ところがですね、四十歳代の時のような気力も体力もございませんから、地道な訳注研究はなかなか進みが悪いわけですね。それで時々編集者には厳しく催促されるのです。私の「失われた十年」をどう考えるのか。十年前に頼んでくれればですね、もうちょっとスムーズにできたはずだと冗談を言っております。出版社に義理立てするよりは、自分の命、健康の方が大事であると言って開き直ってゆつくりやっております。本当は昨年、第三巻を出す予定でございましたが、到底出せないの、『現代に生きる法華經』<sup>46)</sup>という本を出しました。そうはいっても、あまり延ばすと、次の仕事に移れませんので、今年第三巻、来年は第四巻の完成に集中したいと思っております。

『法華文句』についても、中国の朱封鰲という人が『妙法蓮華經文句講釋』というテキストの訳注を出しております。これも便利なものだと思います。

以上、この演題の「中国法華經疏の研究と今後の課題」ということで、雑駁なお話を致しました。中国法華經疏と言っても、『法華玄賛』の研究など手つかずの研究分野は多いと思います。今後、少しずつ研究を進めて参りたいと思います。



## 八 『大乘四論玄義記』

最後に、多少時間があるようですので、私の最近の研究について若干ご紹介したいと思います。二〇〇七年度から二〇〇九年度の三年間、「慧均『大乘四論玄義記』」に基づく中国南朝仏教学の再構築」という題目で科研費を獲得しました。私はすでに「慧均『大乘四論玄義記』の三種釈義と吉蔵の四種釈義」という論文を発表したことがあり、『大乘四論玄義記』には関心を持っていたのですが、科研費を獲得した以上、ある程度集中的に取り組まなければならなくなりました。とはいっても、なかなか集中的に研究する時間的余裕もなかったのですが、この間、日本印度学仏教学会において、二〇〇八年の大会で『大乘四論玄義記』の基礎的研究<sup>48</sup>、二〇〇九年の大会で『大乘四論玄義記』における前代教学の批判―「三乗義」を中心として<sup>50</sup>」を発表しました。また、二〇〇九年の大会では、『大乘四論玄義記』とその周辺」というパネルの代表者を務めました。駒澤大学の奥野先生、伊藤先生にも参加していただき、さらに二〇〇八年一月二十六日の駒澤大学仏教学会で講演された崔鉉植先生に韓国から参加していただきました。私がパネルを開いた背景としては、次のような事情がありました。昨年(二〇〇八年)の二月に、韓国の金剛大(学校)仏教文化研究所が第二回学術セミナーとして、『大乘四

論玄義記』とその周辺」を主催致しました。韓国側から崔鉉植先生、石吉岩先生、ドイツから Jörg Passen 先生、日本側から伊藤先生(書面発表のみ)、奥野先生、そして私が参加し、それぞれ研究発表をしました。私は、最近の『大乘四論玄義記』をめぐる新しい研究の興隆について、ぜひ日本の学会においても紹介すべきであると考え、最も相応しい場所として、印度学仏教学会においてパネルを組織しました。基本的には、韓国でのシンポジウムと同じような内容となりましたが、二月のシンポジウムの後、崔鉉植氏は、待望の『校勘大乘四論玄義記』を刊行しましたので、ちょうど良いタイミングだったと思います。

『大乘四論玄義記』の研究の意義は、詳細な研究の結果、自ずと明らかになる性質のものではありますが、今、気がついているいくつかの点を指摘しておきたいと思います。

1. 南北朝時代の著作の多くが散逸している状況において、本書は実に多くの資料を引用している点が注目されます(とくに三論宗の伝統説と、批判の対象である成実宗の理論の引用)。すなわち、南北朝時代の仏教思想の研究のうえで重要な書物と言うことができると思います。

2. 三論宗の思想が主に吉蔵の著作によってこれまで研究されてきたことは当然であり、妥当でもありませんが、同門の慧均が提示する吉蔵とはやや異なる三論宗の思想

は、三論宗のなかで吉蔵の思想を相対化し、新たに位置づけるうえで重要であると思います。

3. 崔鉉植先生の本書の百済撰述説がもし正しければ、百済の三論宗の実態を明らかにすることができるとともに、中国、百済、日本の三論宗に関する当時の学術文化交流について知ることが期待されます。

崔鉉植氏の『校勘本』が刊行されて、『大乘四論玄義記』の研究は新しい段階に入りました。『大乘四論玄義記』の解読のために、崔鉉植氏の仕事は大きな貢献をしてくれることを実感していますが、それでもなお『大乘四論玄義記』は難解です。今後、訳注研究、思想的研究が待望されると思います。私は、自身の研究のためにラフな訓読訳を作成しましたが、今後のさらなる研究を期したいと思います。

また、中国法華經疏に話を戻すと、当面、『法華文句』の訳注、『法華玄義』の新しい訳注(大蔵出版の新中国訳大蔵經・中国篇の企画)に取り組むつもりです。今回、このようなすばらしい学会で講演する機会を与えられましたおかげで、自分のこれまでの研究を振り返ることができました。これは私自身にとっても貴重な体験でした。若い研究者の方々にとっても何か参考になることがあれば、講演者として望外の幸せです。本日はご清聴まことにありがとうございます。

## 註

- (1) 三友健容『アビダルマデーパの研究』(平楽寺書店、二〇〇七年) 八一六頁を参照。
- (2) 平井俊榮『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』(春秋社、一九七六年)を参照。
- (3) 山川智応『法華思想史上の日蓮聖人』(新潮社、一九三四年) 淨妙全集刊行会、一九七八年)を参照。
- (4) 塩田義遜『法華教学史の研究』(地方書院、一九六〇年)を参照。
- (5) 坂本幸男編『法華經の中国的展開』(平楽寺書店、一九七二年)を参照。
- (6) 丸山孝雄『法華教学研究序説—吉蔵における受容と展開—』(平楽寺書店、一九七八年)を参照。
- (7) 村中祐生『天台觀門の基調』(山喜房仏書林、一九八六年)を参照。
- (8) 菅野博史『中国法華思想の研究』(春秋社、一九九四年)を参照。
- (9) 横超慧日『竺道生撰『法華經疏』の研究』(大谷大学研究年報)五、一九五二年。後に、横超慧日『法華思想の研究』(平楽寺書店、一九七五年)に収録)を参照。
- (10) 中国仏教思想研究会『道生撰妙法蓮花經疏対訳(上巻)』(三康文化研究所年報)九、一九七六年三月)、同『道生撰妙法蓮花

経疏対訳（下巻）』（『三康文化研究所年報』一二、一九七九年三月）を参照。

(11) Youngho Kim, *Tao-sheng's Commentary on the Lotus Sutra: A Study and Translation*. Albany: State University of New York Press, 1990.

(12) 『仏教・インド思想辞典』（春秋社、一九八七年四月）を参照。

(13) 横超慧日「仏教における宗教的自覚―機思想の歴史的研究―」（初出は一九四四年。『中国仏教の研究 第二』所収、法蔵館、一九七二年）を参照。

(14) 前掲書、一八頁を参照。

(15) 菅野博史「道生における機と感応について」（『印度学仏教学研究』三三―一、一九八三年二月、二六一―二六四頁）を参照。

(16) 菅野博史「『大般涅槃經集解』における道生注」（『日本仏教文化研究論集』五、一九八五年三月、七四―八五頁）を参照。

(17) 伊藤隆寿「中国仏教の批判的研究」（大蔵出版、一九九二年）の「序論 第一章 中国における仏教受容の基盤―道・理の哲学」本論 第三章 竺道生の思想・理の哲学」を参照。

(18) 平井宥慶「敦煌文獻よりみた『法華経』研究」（田賀龍彦編『法華経の受容と展開』六三九―六七八頁、平楽寺書店、一九九三年）を参照。

(19) 方廣鎔「敦煌遺書中的《妙法蓮華經》及有關文獻」（『中華佛

中国法華経疏の研究と今後の課題（菅野）

學學報』10期、二二―二三二頁、中華佛學研究所、一九九七年）を参照。

(20) 上海古籍出版社・上海博物館合編『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻』第一冊（上海古籍出版社、一九九三年）一一八―一五九頁を参照。

(21) 方廣鎔編『藏外仏教文獻』第二冊（宗教文化出版社、一九九六年）二九三―三五四頁を参照。

(22) 菅野博史「『法華経文外義』研究序説」（『印度学仏教学研究』五五―一、二〇〇六年二月、四九九―四九二頁）を参照。

(23) 平井宥慶、前掲論文、六六〇―六六一頁を参照。

(24) 「諸相善」「世間相善」の「相善」を「有相善」と解釈することについては、『法華経文外義』の「相善」の用例を参照。たとえば、「以都都驗、故知世間有相諸善皆能運載、得為乘体體也。又問。若世間善都以為乘体者、世間善有動出。何以経言、世間諸善、不動不出、有相沈沒、無相出世也。此解詎不違経文也。又解。道言相善不動不出者、靈山以前不了義説、為修五戒十善、得人天果報、屬於人天、名人天乘。」（方廣鎔編『藏外仏教文獻』第二冊、前掲同書、三〇〇頁）を参照。

(25) 池田宗讓「俗諦常住」考序章「法華経の『世間相常住』解釈ノート」（『三康文化研究所年報』三九、二〇〇八年三月、一―三四頁）を参照。

(26) 佐藤哲英「続・天台大師の研究―天台智顛をめぐる諸問題―」

- (百華苑、一九八一年)二六九―二八〇頁を参照。
- (27) 拙著『中国法華思想史』の第一部・第三章に劉虬の『注法華經』の逸文を集めたが、第10番の逸文の後半が欠けていたの、ここで訂正しておきたい。本文に「注経云、諸尼之中、拳婁妻二人者、豈唯標親以兼疎。乃因名以託旨。」と示したが、その後、「浄名経云、智度菩薩母、方便以為父、法喜以為妻。欲明虚己修度則從生之義顯、減累体法則伉儷之業成。」が続く（拙著、一二六頁）。
- (28) 田村芳朗「法雲の法華義記の研究」（坂本幸男編『法華經の中国的展開』一七五―二二一頁、平楽寺書店、一九七一年）を参照。
- (29) 菅野博士『法華義記』（法華経注釈書集成2、大蔵出版、一九九六年）を参照。
- (30) その成果は、『南岳思大禪師立誓願文索引』（共編、一九八八年三月、東京大学東洋文化研究所）を参照。
- (31) 川勝義雄「中国的新仏教へのエネルギー―南岳慧思の場合―」（福永光司編『中国中世の宗教と文化』所収「京都大学人文科学研究所、一九八二年」五二二―五三〇頁）を参照。その後、川勝義雄『中国人の歴史意識』（平凡社、一九九三年）二〇七―二七四頁に収録された。
- (32) Daniel B. Stevenson and Hiroshi Kanno, *The Meaning of the Lotus Sūtra's Course of Ease and Bliss: An Annotated Translation and Study of Nanyue Huisi's (515-577) Fahua jing anlezhing yi*. 2006. Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica, vol. IX. The International Research Institute for Advanced Buddhism. モノグラフのなかの菅野論文の日本語原文は、菅野博士『法華経安楽行義』の研究（1）（『東洋学術研究』四三―二、二〇〇四年二月、一七六―一九五頁）、『法華経安楽行義』の研究（2）（『東洋哲学研究所紀要』二〇、二〇〇四年二月、五三一―八一頁）を参照。
- (33) 伊藤隆寿「三論宗関係典籍目録（稿）」（駒澤大学仏教学部研究紀要『五四、一九九六年三月』）を参照。
- (34) 『法華統略』上（法華経注釈書集成6、大蔵出版、一九九八年）、『法華統略』下（法華経注釈書集成7、大蔵出版、二〇〇〇年）を参照。
- (35) 智山伝法院編『真福寺文庫撮影目録』上巻（真言宗智山派宗務庁、一九九七年）、同下巻（一九九八年）を参照。『法華統略』の二種のマイクロフィルムについては、上巻一四〇頁（番号48211）と下巻五三六頁（番号6152）に記載されている。私が翻刻したものは、上巻に記載された写本である。
- (36) 奥野光賢『仏性思想の展開―吉蔵を中心とした』法華論（受容史）（大蔵出版、二〇〇二年）一三一―一三五頁を参照。
- (37) 菅野博士『法華とは何か―『法華遊意』を読む―』（春秋社、一九九二年）を参照。

- (38) 『韓国伝統思想叢書 仏教編 元暁』(近刊)に収録される。また、Charles Muller, "Wonhyo on the Lotus Sutra" (『印度哲学仏教学研究』16、二〇〇九年、二五—三八頁)を参照。
- (39) 平井俊榮『法華玄論の註釈的研究』(春秋社、一九八七年)、『続法華玄論の註釈的研究』(春秋社、一九九六年)を参照。
- (40) 菅野博史『法華玄義』上・中・下(第三文明社、一九九五年一月、二月、三月)、『法華玄義入門』(第三文明社、一九九七年)を参照。
- (41) *Foundation of T'ien-tai Philosophy*. Berkeley: Asian Humanities Press, 1989.
- (42) Shen Haiyan, *The Profound Meaning of the Lotus Sutra: T'ien-tai Philosophy of Buddhism*, 2 volumes. Delhi: D K Fine Art Press P Ltd, 2005.
- (43) 李志夫『妙法蓮華經玄義研究』(中華佛教文獻編撰社出版、一九九七年)を参照。
- (44) 平井俊榮『法華文句の成立に関する研究』(春秋社、一九八五年)を参照。
- (45) 菅野博史『法華文句』における四種釈について(『印度学仏教学研究』五四—一、二〇〇五年二月、七九—八七頁)を参照。
- (46) 菅野博史『現代に生きる法華経』(第三文明社、二〇〇九年)を参照。
- (47) 朱封齋氏が『妙法蓮華經文句校釋』(宗教文化出版社、二〇〇〇年)を参照。
- (48) 菅野博史「慧均『大乘四論玄義記』の三種釈義と吉蔵の四種釈義」(『木村清孝博士還暦記念論集・東アジアの仏教』所収、春秋社、二〇〇二年、八七—一〇〇頁)を参照。
- (49) 菅野博史『大乘四論玄義記』の基礎的研究(『印度学仏教学研究』五七—一、二〇〇八年二月、六一—三九頁[左])を参照。この論文をやや拡大した論文を韓国で発表した。『大乘四論玄義記』の研究序説—自己の基本的立場の表明(『불교학리』5、二〇〇九年六月、六五—九〇頁、Geungang University)を参照。
- (50) 菅野博史『大乘四論玄義記』における前代教学の批判—「三乗義」を中心として(『印度学仏教学研究』五八—一、二〇〇九年二月、五〇—四九三頁[左])を参照。

(平成二三年一月三〇日 駒澤大学仏教学会公開講演会)